

『スタンフォード』大學遊學中の大島學士氏より遙々本誌に寄せられたる記事を抄譯す、茲に同君の好意を謝す。

カリフォルニア洲の檢疫法に據れば「モングース」を害動物とし、之を輸入するものは犯罪者と看做すとは實に當を得たる所にして、これ一八九八年の農務省の年報によるも明なり。即インド産普通の「モングース」(*Hesperomys mungus* or *Hesperomys*) は鼠、トカゲ、蛇の撲滅者たるは著名なる事にして、ジャマイカ及び其他の熱帶諸島にては甘蔗畑の鼠を驅除せんがため輸入せられたり。ジャマイカ島にては從來鼠害と鼠退治に消費せし金額毎年十萬圓に達し、種々の企策も何等功を奏せず。一八七二年二月に W. BANORCHET ESPEY が四牡五牝の「モングース」を印度より輸入せしにその繁殖迅速にして忽ち全島に瀰蔓し、最高の山頂にてすら見出さるゝに至れり。而して他方鼠の減少は亦驚くべき程にして十年の後(一八八二年)に至り製業者は年に四十五萬圓の利を收むるに至れり。然るに「モングース」は猶も繁殖を續け蠶食性を忌憚なく發揮して雞、豚、羊仔、犬の仔、鳥卵、蛙、龜の卵、陸蟹を食するに至り「バナ、」¹「バインアップル」²甘薯、玉蜀黍等をも食し、輸入後二十年にして最初の益獣も却て有害獣と看做さるゝに至り、短尾 *Cynomys*, ground dove, quail dove, bobwhite, Jamaica petrel (*Estrelata acril-buena*) の如き殆んど絶滅に瀕する状態に陥れり。同島の無害なる蛇五種(トカゲ(二十種)も著しくその數を減少し

(雜 錄) ○恐るべきモングース ○人工單爲生殖の蝌蚪の性

陸産の龜も同様の運命を見るに至りたり。昆蟲、ダニ等を食する鳥、蛇、トカゲの減少に連れて害蟲の跋扈甚しく一八九〇等に「モングース」撲滅策を講ずる委員撰定せらるゝに至れり。要するに「モングース」の害は甘蔗及びコーヒー園に與ふる利得に勝ること數等なるは明なり。(Monthly Bulletin of the State Commission of Horticulture of California. July 1913 p. 317) (谷津直秀)

●人工單爲生殖の蝌蚪の性

昨年發行の本誌(第二十八卷第三百三十二號二四三頁參照)にロイヴが得た人工單爲生殖の蝌蚪は雄であつたと記してあるが、其後オクスフォードで GALENEY と云ふ人の見たのも矢張雄であつたと云ふ。此人が手術に就て云つて居る事の中に斯様な事がある。卵を取出す雌は豫め體をアルコールで良く洗ひ、又手術の際には卵が體に觸らぬ様に注意する。其卵は直に血液と淋巴の混合物に入れ硝子の針で刺すのである。此針は硝子棒を引伸して造つた物より、硝子管を伸した方が成績がよかつた。それは針が中空であると血や淋巴を比較的多く卵の中に入れるからであらうと云ふ。此人は五千個試みた中で五十個神経管の閉ぢる迄發達し、其中十五は外鰓の蔽はれる迄になつたが、愈々性の分る様になつた者な唯一足だけであつた。(駒井 卓)

●津雲人種及アイヌの眉